プレシイブ・マグナ

斎藤　君亜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
プレシイブ・マグナ

【Ｎコード】
Ｎ６５９４Ｘ

【作者名】
斎藤　君亜

【あらすじ】
少年、逆月悠麻は『クライツ』と呼ばれる都市全体を支配するカンパニーのせいで自らの父親から大量殺戮兵器である『ウルバイス・マグナ』を埋め込まれる。
でも、それは父親が悠麻に残した最後の希望。
人の心と体、そして、圧倒的な殺戮能力を持つ彼は復習を遂げるのか、それとも……。

序幕　始まり（前書き）

――――目覚めに見るのは、光か闇か？
俺に映るのは希望か絶望か？
それを知るすべは無い……。

序幕　始まり

夜。
闇の中、蠢くものがいる。それはとても人間とは思えない形をしており、それが元は人間からできているとは思えないほど、醜悪なモノだった。
「ギャハハハハ、この力、たまらねぇーな、おいっ」
そいつは鹿の頭を肥大化させたような頭に筋骨隆々の身体をしていた。
今はそれを駆使し、街を壊しているのだが……。
あの生物を、俺とある連中は『ディーア・プレシイプ』と呼んでいる。
しかし、もっと大きくわけるならあれらは『生物型軍用兵器プレシイブ』。
人間をベースとし、様々な動物の遺伝子を混ぜ合わせ、新たな生命を誕生させた兵器、それが『プレシイブ』だ。
そして、俺は、そいつらを狩る“兵器”だ。
俺は、胸元の十字架を握り、十字架の機体名を言う。
「『ウルバイス・マグナ』」
それだけで俺の手には刃渡り八十ｃｍぐらいの幅広の片刃剣が握られ、全身を中世の黒の鎧みたいなものが包み込む。
これが俺の持つ、唯一にして最高の武器。
俺はそれを使い、今日も『プレシイブ』と戦っている。
◇
朝。
俺、逆月悠麻（さかづきゆうま）は眠い目をこすり、賑やかな学校までの道を歩いていた。
そして、俺は周りを見てはため息をついていた。
なぜなら、周りには笑顔が溢れ、いつもとなんら変わらぬ毎日を、

生物兵器も何も知らない平和な生活を送っていた。
「……やっぱ、バカみてーだよな」
俺は小さく呟き、自らの不幸を呪った。
そして、俺が俺で無くなった日を、家族失った日を思い出していた。
◇
気がつけば、辺りは火の海だった。
『父さんー、悠太ー、どこだよー！』
煙が蔓延している中を無謀にも大声出そうとしてもかすれた声しか出ない俺。
その目の前には、親父と一人の若い男が立っていた。
『逆月博士、一緒に来てもらおうか？』
『なんのために！』
若い男は白いローブの様なものを着て、親父が膝をついている真正面に立っていた。
『何のため？わかっているでしょう？天才と名高い逆月博士なら』
『まさか、『プレシイブ』か！』
親父が何かを研究している事は幼い時の俺にもわかっていた。
まあ、まさか、戦争のために使われるとは、当時の親父には考えも至らなかったのだろう。
男がそう言うまでは……。
『そうだよ、『プレシイブ』さ。それがあれば、なにができると思う？逆月博士』
白衣の男は嬉々としながら喋り始めた。俺はそれをただ壁に隠れてみることしかできなかった。
そして、男の問いに親父は
『延命だよ。でも、私の実験は、人間への、侮辱にしかならない！』
『ああ、そうだろうね。貴方ならそういうと思ったよ。でもね、』
男は悲痛そうな親父を一瞥し、いきなり声を荒げた。
『『プレシイブ』はそんなもんに使うもんじゃないだろ！あれはね、生物兵器として初めて真価を発揮するんだよ！』

俺には親父のつばを飲み込む音まで、その時は聞こえた。だから、その後のセリフも一字一句まで覚えている。鮮明に……。
『そうだろ、元・兵器研究部のイヌが！』
時間が、止まった気がした。自分の親が人殺しに手を貸していたという事実に、俺は絶望したんだ。
『さあ、来るんだ。今来れば、子供は助けてあげるよ。まだ、妻を殺してから日が浅いんだろ？』
俺は、それから先を覚えていなかった。後ろから殴られ、意識を失っていたからだ。
そして、それからは酷かった。
俺と悠太は毎日、わけのわからない注射を打たれ、審査し、俺だけ、手術をした。
そして、最初の手術が俺と親父が会った最後の日だった。
『悠麻、ごめんな。こんな、頼りにならない親父で……ごめんな。世界を、息子に託すことしかできないダメな親で、ごめんな』
そして、最後まで泣いていた。
手術が終わると同時に、俺は『ウルバイス・マグナ』の強制発現で研究所から逃げ出した。
親父と悠太を置いて……。
◇
俺はそんな事を思い出していたためか公園で立ち止まっていた。
俺は公園の風景をもう一度よく見た。公園には小さい子供が父親と遊んでいたり、カップルが休んでいた。
その中でも特に俺は男の子が父親と遊んでいる姿を見ていた。
「パパ、あっちにいこっ！」
「わかったわかった。行こうか、幸太」
俺はそれに自分たちを重ねていた。もう戻らない時間を、懐かしむかのように。
でも、それは一瞬で、また俺の目の前で悲劇は繰り返されようとしていた。

「ううっ」
「パパ？」
突然。そう、突然に父親だった男が苦しみだした。
俺はこの現象を知っている。知っているから、身体は震え、父親と子供を見ているだけだった。
「パパ、パパ！？」
「うっ、ぐはぁっ、はなれ、ろ、幸……太。あ、あぁあああああああ」
「パパー！」
そして、男の子の父親は内部から何かに崩され、中から化け物、いや、『プレシイブ』が現れた。
そして、父親だった『プレシイブ』が自分の子供を突き飛ばした。
俺の方向に来た男の子を俺はなんとか支え、周りを見る。
やっぱり、朝の公園はいきなり現れた化け物のせいでパニックに陥っていた。
俺の腕の中の男の子も自分の父の変わり果てた姿を見て、俺のシャツを握っているだけだった。
「ナンダァ？旨そうなニンゲンはあんまりいなそうだなぁ？」
内面まで変わってしまった自分の父親を、今は人間大の蜘蛛の様な姿になった父親を……。
俺は、十字架を握り、唱えた。
「『ウルバイス・マグナ』」
十字架は俺の中に眠る親父が残した最後の希望の鍵となる。そして、俺は唯一それに適合した素体。十字架からあふれる光は俺を包み、機械の装甲を造りあげていく。
装甲は黒色の中世の騎士の様な相貌になり、手には幅広の剣を握っていた。
そして、俺は男の子を横に優しく下ろし、『スパイダー・プレシイブ』へ斬りかかった。
「ギャアアアア」

俺は腕を斬り落とし、素早くそいつから離れた。
『スパイダー・プレシイブ』はこちらを睨み、叫んだ！
「貴様ぁ！よくも俺の腕を斬ったなぁ！殺してやる！」
「お前、『クライツ』を知っているか？」
しかし、俺はその叫びを無視し、ある確認を取った。
「ああ、『クライツ』だぁ？知るか、んなもん！」
「なら、良かった」
激昂しているスパイダー・プレシイブをよそに俺は安心していた。
あの子の父親を殺さずに済むと……。
俺は剣を、スパイダー・プレシイブは俺の攻撃に備えるように足を、それぞれ構えた。
「はぁ！」
剣が空を裂く、それは簡単に構えた二本の足を斬り裂いた。そして、俺は振り抜いた剣でそのまま突き刺そうとした。
しかし、それは次の行動で止められることになる。
「待ちな！いいのか？他の奴らがどうなっても？」
俺はその言葉に剣を止め、周りをさっと見る。そこには、たくさんの人が浮いていた？
「何をした！」
俺は剣の切っ先を下げずに問いかけた。
「なにって？あいつらの首を絞めているだけだが？お前がそのまま俺を斬れば、もれなくあいつらもあの世行きだけどな！」
俺はその言葉に唖然として、蹴りに気付かなかった。なので、顔を思いっきり蹴られた。
「ぐはぁっ」
なんとか空中で体勢を立て直したものの、今の状態じゃ攻撃すらできない。
その間もスパイダー・プレシイブは間合いを詰め、俺を殴り続けた。
「ハハハハハ、無様だなぁ、おいっ！」
「ぐっ、そ」

なんとか体勢を保ち、剣を構えた。
あいつを倒すにはあいつが糸を引くより早く攻撃するか、糸を斬るしかない。でも、そんなことできるのか？親父のおかげで人間離れした能力は確かにあるが、それにも限界はある。
俺が、確実にみんなを助ける方法は無い。
「さぁーて、あとどれぐらいいたぶろうか？」
俺が斬っていない手は全部で三本。そのうちの、二本をゆっくりと俺に近づける。
――――いや、まてよ？俺はさっきから一定の二本でしか攻撃を受けていない。
ならば、それをぶった切れば、助けられるんじゃ？
ギリギリと音がどんどん近付いてくる。それでも、俺は、笑っていた。
「はは、はははははは」
「なんだ？ついに気がふれたか？小僧！」
そう言い放ち、スパイダー・プレシイブの手が、糸が俺へと迫ってきた。
だけど、
「遅い！」
俺はそれを斬って、一気に間合いを詰めた。残った一本を目指して。
それを察したのか、動かそうとするが、もうすでに何かもが遅い。
俺は糸がつないである腕を斬り、そのまま、胸を貫いた。
「ぐはぁあああああ」
「ウルバイス・マグナ、オーバードライブ！」
そのままの体勢で俺は剣の間をエネルギーで開き、高密度のエネルギーを一瞬だけ拡散させた。
それは強力な波として、スパイダー・プレシイブの核とも呼べるマイクロチップを破壊した。
剣を引き、スパイダー・プレシイブだったものを見下ろす。
そこには、元の温和そうな父親がいた。

男の子はそこに駆け込んできて、父親が目を覚ました。
そして、眩いばかりの笑顔がその場に溢れた。
俺は、それを見ると飛びさった。

序幕　始まり（後書き）

この作品はタイトルが決まっておりません。
タイトルを募集しております。
案があったら送ってください。
よろしくお願いします。

第一話　エピローグへのスタート（前書き）

始まりを迎えたエピローグ。
その先にあるのはＥＮＤかＳＴＡＲＴか？

第一話　エピローグへのスタート

俺、逆月悠麻は最大のミスを犯していた。
それは、学園の入学式に遅れる事だった。昨日まで休みだったために俺は気が抜けていた。
だからこそ『ウルバイス・マグナ』を普通に使い、どっかに飛んで逃げてしまったのだから。
「最悪だ」
俺は走りながら、携帯を確認する。
８：２８
入学式は、８：３０……絶望的だ！
俺はこうなりゃ、ウルバイス・マグナで飛んでいくかなどと自暴自棄になっていると……
「のわっ」
「きゃあ」
ぶつかった。どうやら、気付かない間に俺は前を走っている人にぶつかったらしい。
しかし、格好が問題だった。
下にいた女の子に馬乗り、女の子は俺の方を見る体勢で押し倒してしまっていた。彼女は外国人なのか、ブロンドの髪に目は黒に近くなった碧眼を備え持っていた。
「ひうっ……」
「……マジ、かよ」
――――俺は容姿を話している場合じゃなかったんだ。だって、彼女は
「～～～～～っう、うわぁー！」
ついに叫んでしまった！周りに人がいないのだが、家はある。だから、人が出てきやがったー！
「ありえねぇー！」

俺はぶつかった相手を放って、走り去った。
まだ捕まりたくないし、捕まるわけにもいかないからな。
逃げた。
だけどそれは全速力で俺は学校へ怒られに行くようなものだった。
◇
「なんたる不幸だ」
俺は担任に怒られ、新しいクラスの連中に笑われた。まあ、いきなり遅刻だししょうがないか。
俺は弁解する気も無いので、一番後ろに座った。隣の人はいないらしい。俺と同じ遅刻者ならいいなぁ、など俺は考え。まあそんなわけないよな、と、自己完結した。
俺は空を見上げ、少し今日起きた事を整理した。
公園での『プレシイブ』との遭遇、交戦。
これは『クライツ』の行動が過激化した事を意味するだろう。
やっぱり俺を、いや『ウルバイス・マグナ』を探しているのか……。
なら、これからは交流をできるだけ少なくした方がいいよな。
俺は少し重い溜息をついて席に突っ伏そうとした。
しかし、目の前に影がよぎる。
「逆月くん。何をやっていたんですか！」
「んあっ？委員長？」
「まだそうではありません！」
「あっ、そう」
「そうです」
「んっ、おやすみ」
「じゃなくてっ！」
俺はいきなり会話してきた委員長の大声で再度起こされる。なんっうか、さっき『できるだけ距離をおこう』と思った俺の決意を裏切る行為だよな。これってさ。
仕方なしに身体を起こし、聞く姿勢を取った。
「で、なに？間宮さん」

「あなたは朝何をやっていたのですか」
「寝てた」
「……わかりました。あとで反省文を、いいですよね」
「おお、いいぞ。やんないと思うけど」
「……」
無言でこちらを見る間宮瞳（まみやひとみ）の顔には怒りと落胆が浮かんでいた。
「んっ？どうした？」
「いえ、とりあえず渡してはおくので……」
「わかった」
これでようやく間宮は席へと戻ってくれた。
言い忘れていたが俺の学校は中・高・大がエスカレーター式の学校だ。だから見知った顔も多い。間宮もその一人だ。
「よぉ、やっぱモテモテだな」
「なぁ、なんで三年間も一緒だったのにまた同じなんだよ。春喜」
俺は肩を組んできた親友（負け犬）の顔を見ずに溜息交じりに言い放つ。
「なんか……失礼な事言わなかったか？」
「んっ？気のせいだろ？親友（負け犬）」
「お前、そこまではっきり言うか！」
「はは、わるい。春喜」
やっぱり、俺には無理なのかもな距離をおくなんてさ。だから目標変更。俺は手に届く範囲の奴は全員護ってみせる。
俺は隣で騒ぎ始める親友をなだめながら、そんなこと思っていた。
◇
暗い、
恐い、
助けて、
兄さん！
僕は闇の中で叫んでいた。しかし、声を発する事は出来なく、無駄な足掻きにもほどがある。

「たくっ、少しはおとなしくしろ！逆月悠太！」
僕と父さんと兄さんをさらった人の声が響く。だいぶ苛立っているようだ。
「ほんとに、お前の親と兄貴には苦労させられる。だが……それも今日からの実験で終わりかな？逆月悠太」
僕はわけが分からなくなっていた。実験？それは兄さんがやっていた事じゃ？
もしかして、兄さんは逃げたのか！？
しかし、聞きたくても声すら出ない。僕は……無力だ。
僕は久しぶりに解かれた拘束から抜け落ち、床に倒れた。足には力が入らず、立つことさえできない。髪はとても長くなり、ボサボサだ。
「ふむ、まずは格好を正すか」
「……」
「いくぞ、逆月悠太」
「……はい」
僕はついていった。兄さんと、戦うために……僕自身を守るために……。
◇
「じゃあ、今期から入ってきた転入者を紹介するぞ。入って来い」
「だれだろ～」
「イケ面なら殺す」
「美少女ならカンゲーですっ！」
とそれぞれで盛り上がる俺のクラス。俺はどっちでもいいやという考えで、眠りへと意識を手離そうとしたが、次の瞬間に立ち上がって外へと出た。
何故って？
俺が今日押し倒した女の子だからだよ！
「あ、あなたは！」
「頼む！朝の事は謝るから！責任は取るっ！だから、余計な事を喋

るな……喋らないでください！」
俺は他のクラスの誰にも言えない事をしてしまっている。しかも、皆の言う美少女と言う部類の子にだ。俺はまだ死にたくない。普通の人間には負けない力があるとはいえ、社会的に死んだら意味がないだろ？
「えぇ～っと、言いにくいんですけど……私たち、見られてます」
白い顔がかなり濃度で赤くなっている事に俺は気付いた。そして、自らへと降り注ぐ避難と殺意の視線。いま後ろを向けば、俺は死ぬかもしれない。だけど、俺は後ろを向いて一言言った。
「……誤解だ」
「「「「「んなわけねぇだろぉー！」」」」」
その後俺は職員室へと呼び出されたり、間宮や春喜に追いかけ回されていた。
転入生、名を国谷・シェリーというらしい。シェリーはその後、色々女子から俺の事について質問攻めされたそうだ。変な事を口走ってなきゃいいんだが……。
ついでに俺は放課後に入った校舎から街中へと逃げ場を変えた。その方が捕まる可能性も見つかる可能性も低くなるからな。
しかし、人生うまくはいかないもんだ。
「おいっ、逆月はどこに行った！」
「まだ遠くには行っていないだろ！そこら辺の路地を探せ！」
「ぶっ殺してやる！悠麻ぁー！」
……俺の周りには三人以上いるんだよ！なんなんだよ、勘にしてもほどがあるだろ！
そして、今日一日はそれに費やされた。
◇
「もしもし、ｓｈａｒｙ？」
「そうだよ、ｅａｇｌｅ」
「調子は？」
「上々」

「それならいい。幸運を祈るぞｓｈａｒｙ」
「うん、わかったよ」
Ｅａｇｌｅと呼ばれた彼は電話を置き、逆月悠麻と悠太のデーターを比べた。
「おもしろい、逆月悠麻。貴様だけは私の策で殺してやる。『ノスタル・カルム』でな！」
逆月博士が残したもう一つの機体『ノスタル・カルム』。それは逆月悠太に組み込まれていく。洗脳チップと共に……。逆月悠麻を殺すために

第一話　エピローグへのスタート（後書き）

タイトル募集中。
おねがいします！

第二話　強襲と涙と（前書き）

誰がために少年は背負う。
悲痛と責任、そして憎しみと恐怖を……。

第二話　強襲と涙と

悠麻がスパイダー・プレシイブと戦ってから一週間後。
その一週間の間、悠麻は一度たりともウルバイス・マグナに乗っていない。
当の本人は、平和な事はいい事か。と、半ば投げやりな意見を抱いている事は甚だしい事だとは思うが……。
それよりも彼は今、目の前に迫った問題に頭を悩ましていた。
「だぁ！見つかんねぇ！」
悠麻は今、マグナシステム（逆月博士が極秘に搭載したためにクライツにバレていないシステムの事）に搭載されている電波傍受機能で弟の悠太についての情報を集めていたわけだが……いかんせん入って来るの情報は優良会社としての？クライツ？の情報だけなのだ。
（ちくしょう……どうすればいいんだよっ！）
悠麻はやり場のない怒りをただ溜めていくだけだった。
この時、悠麻は忘れていたのだ。自分にはもう一つ、差し迫った問題がある事に……。
◇
プルルル、プルルル、プルルル、ガチャ。
「おーい！ゆ「この番号は現在電波の届」ブチッ（通話終了ボタンを押した音）」
まだ桜が残る町の駅前で悠麻の親友？の中島春喜（なかじまはるき）は悲しそうな笑顔でこう呟いていた。
「今日、休みだから遊ぼう！って三人に言ったよな、僕」
この場合の三人とは悠麻、間宮、シェリーの三人である。
意外と社交的であったシェリーは最初あった当初は悠麻の顔を見るたび赤面していたが、間宮の説得等のかいあってか、二日三日でなんとか治し、普通に話せるようにまでなった。
そこでいい機会だからと春喜は悠麻、間宮、シェリーの三人でどこ

か行こうと誘ったのに、待ち合わせ時間五分前に集合場所まで来たのに……そこにはだれも来てはいなかった。
今は、待ち合わせ時間の十分後。
春喜は溜息をついて、それぞれの携帯にメールを送った。
一方、その頃の間宮たちは服選びで時間を費やしていた。これは女性だから仕方のない事だが……それだけでは現委員長（クラス内で満場一致だった）で真面目という言葉がここまで似合う人は他にいないと揶揄された間宮が遅れるはずがない。
理由はいかにも単純明快だった。シェリーと途中であって、そのままお茶をしてしまったからだ。まあ、春喜<<<お茶というのはかなり酷いものなのだが……。
悠麻は悠麻でシステム使った電波傍受を行っていたために電話の電源はオフにされていたわけで……届くことすらなかった。
――結果的にいえば、全員揃うことはできたが時間は集合時間の一時間後になってしまっていた。
「で、なにをするんだよ？春喜」
「そうです。何にも言わずに遊ぼうだけではわかりませんよ」
「わ、私も、知りたいです」
全員で春喜を問い詰める。みんな、遅れてきた事など無かったかのようだ。
それに対して、春喜は格好つけた感じの笑みでこう口にする。
「ふっ、わからないのか？シェリーさんが来てから一週間。ここらでシェリーさんの歓迎会をしようと思ったんだ」
「そうだったんですね」
「あ、あの、ありがとうございます」
女性二人は口々に春喜を褒める。それに対し、悠麻は……
「……お前の口から、まともな意見が出るなんて……明日にでも、雪かなんか降るんじゃないか」
「あなたはどうして、そう、あげて落とすのが好きなんですかねっ！」

「まあ、いい案だと思います。どこか行きたいところはありますか？シェリーさん」
「私は、服とか見たいです」
「じゃあ、ショッピングモールにでも行くか」
「あれ、僕無視？」
彼らは談笑しながら、モールへと足を運んで行った。
それを何体かのプレシイブがにやけながら見ていた。
「わぁ、これなんですか？！」
「これは、ここに着ける物なんですよ」
「きれいですね」
「疲れるなぁ、こういうの」
「ホントだねぇ～、僕たちにはこういうのは向いていないよなぁ～」
「たちってなんだ、たちって……まあ、否定はしないが……」
「逆月さぁ～ん、これとこれ、どっちがいいでしょうか？」
「逆月くん、これはどうでしょう？」
二人に同時に意見を求められた悠麻は少しげんなりした風に二人の傍へと向かった。横にいる春喜は「なんで、悠麻だけなんだよっ。僕の方がセンスはあるのに……」とかなんとかぶつぶつ言っているが……悠麻は気にはしない。
しかし、そんな和んだ時間もすぐに終わる事になるのにそこにいる一般人は誰も気付けなかった。
ピシッ。
悠麻たちの床からかすかに音が響く。それに気付いた悠麻は間宮とシェリーを抱き、その場から飛び退いた。
その一瞬後に床は崩落し、三匹の『ディーア・プレシイブ』が現れた。
ディーア・プレシイブは量産性が高いプレシイブで鹿の様な頭と屈強な身体を持つ、二メートル弱の多少大きめなモノだった。
現れた後は最悪だ。店内はもちろんパニックに陥り、人同士が押し合い、倒れ、踏まれ、死ぬ者もいた。

そんな中動かなかったのは四人いた。
———悠麻たちだ。
「逆月くん……あり「礼は後でいい！逃げるぞ！」う、うん」
「逆月さん、足から血が……「おまえもいいからっ！」はいっ！」
「悠麻ぁ！「おまえはこいつら連れて行け！春喜！」お前は！？」
「俺は、こいつらと少し遊んでもらうよ」
悠麻は血が滲み始めた足で立ち上がり、プレシイブたちへ向き直った。
対して、プレシイブたちは健気な弱者を見下す目をして悠麻を見ていた。
その間にも春喜たちは非難を始めた。いや、正直いえば避難なんて生易しいものではなく春喜が無理矢理にも間宮とシェリーを連れ出そうとする。それに対し、二人は逃げようとはせずに悠麻へ、叫んでいた。
「逆月くん！危険です！早く逃げて！」
「逆月さんっ！ダメです！」
「うるせぇよ！さっさと行け！後で説教ならいくらでも聞いてやるから！」
悠麻は間宮とシェリーに怒鳴る。それで、黙ってくれたのは僥倖と言えよう。
横にいる春喜はゆっくり口を開き、悠麻の友人としていや、相棒としての言葉をかけた。
「悠麻……生きて戻って来いよ！」
「……るっせぇ。んなところで死ぬかよ」
悠麻と春喜は互いに少し笑いながら、顔を見合わせた。それだけで、十分にお互いの事がわかった気がした。
しかし、そんなことをいつまでも続けてる余裕もないわけでプレシイブたちが口を開いた。
「さぁて、仲睦まじい友情ごっこは終わりにしてくれよぉ。まあ、後でテメェのお友達もじっくりなぶり殺してやるよ」

「そうそう。君もじっくりなぶって殺してあげるから、安心して死にな」
「くくく。始めようかぁ？殺戮ショーをさぁ」
「……うるせぇよ、クズ共が！お前らの、お前らの、お前らの言う事は、なんでいつもそうなんだよっ！テメェらだって元は人間だろっ！」
「人間ねぇ。そんなもんはとっくに卒業してんだよぉ！俺たちは人を超えた新人類なんだよぉ！」
悠麻の言葉は嘲笑で吹き飛ばされた。いや、彼にはそんな結果が見えていたのだろうが、手からは血が滴り落ち、床に血痕が飛び散る。そして、悠麻の手は胸元の十字架に伸び、決めた。
（倒す……いや、殺す。こいつらは、人間じゃないんだ。だから、俺は……）
「『ウルバイス・マグナ』ぁあああああ！」
光の奔流。それは悠麻の体を包み、鎧を構成させていく。
「テ、テメェが、ウルバイス・マグナかっ！」
「ああ。お前らを、助けてやるよ」
（人間としての心を、もう取り戻せない心を、人を殺すことしかできない哀れな獣としての人生を、終わらせてやるよっ！）
悠麻は剣を構え、そして、一気に間合いを詰めた。
一番前にいたプレシイブがカウンターのつもりか、出してきたパンチを悠麻は紙一重で避け、更に剣で下から斬り上げた。
ブシャァアアア。という音が響き、血が切断面から飛びだしてくる。
プレシイブは痛みで声を「グァアアアアアアア」と絶叫を響かせ、斬られた方の腕を抑えた。
だが、それを黙って見ているなんて愚行をするほどプレシイブはアホでもお人好しでもない。
剣を斬り上げた直後の無防備な悠麻に左右から同時に波状攻撃を仕掛ける。
ガツン。

鈍い音が響く。そして、ゆらりと二体のプレシイブの体が揺れた。
「な、なんでだあぁあああ！」
「腕が、腕がぁあああ！」
悠麻は剣で一匹目の攻撃を受け止め、二匹目の攻撃は腕で逸らすように避けた。
当たり前だが、二匹のプレシイブには隙ができる。瞬間的に悠麻は刃をプレシイブの腕に合わせて立て、引き、流れ作業のような手つきでもう一匹の腕を切断した。
二匹の腕から血がとめどなく溢れる中、悠麻には返り血一つすらついてはいなかった。
しかし彼は剣技等習っているわけでもない。そんな人間が返り血一つ浴びないで人を斬るなんて難しい。いや、例え剣技が異常に巧くても血は浴びてしまうものだろう。ただ、悠麻の場合はクライツの実験で人より圧倒的に反射神経、筋力等が上がっているのに加え『ウルバイス・マグナ』という悠麻最大の武器である機体によるアシスト機能の様な物で更に能力が飛躍的に向上しているという他とは隔絶された力がある。
だがしかし、彼は今までに一度も血一つ浴びなかった戦いは無かった。これらのことは彼の真の力の片鱗が今ここで目覚め始めているのではないのかもしれないという考えと同義だと言えよう。
「もう、お終いだよ」
再び、剣を振るう。周りにいた二匹を胴から両断し、斬られた一匹の後ろから突っ込んできた最後の一匹も、悠麻はあっさりと斬り裂いた。
そして、圧倒的な強さで生き残った悠麻の目からは涙が一つ、零れ落ちた。

◇
余談
その後悠麻は女性二人から二時間にもわたる説教と、罰ゲームを言

い渡されたのは別のお話で……。

第二話　強襲と涙と（後書き）

三人称視点で書いてみました。
上手くいっているといいんですが……。
ぜひ、感想をください！

次回予告（某天使のＢＥＡＴＳ的に）
「はあ？何言ってんだ、お前」
「ミスレディ、要件は何ですかい？」
「あんまり、無茶はしないでくださいよ……逆月くん」
「僕の価値ってそれぐらいですかっ！？」
「会いたかったよ、シェリー。いや、ミスレディ・Ｓｈａｒｙ」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6594x/

プレシイブ・マグナ

2011年11月28日00時01分発行